平成 26 年度　第２回　鶴岡市立藤沢周平記念館運営委員会（会議概要）

○日　時　　平成 26 年 12 月 13 日（土）午後 1 時 45 分～3 時 45 分
○会　場　　東京第一ホテル鶴岡
○審議事項　１　報告
　　（１）平成 26 年度運営状況について
　　２　協議
　　（１）　開館 5 周年記念特別企画　第 8 回企画展について
　　（２）　開館 5 周年記念特別企画　第 9 回企画展について
　　（３）その他
○出席者委員
　遠藤展子、遠藤崇寿、湯川　豊、鈴木文彦、栗原正哉、犬塚幹士、東山昭子、髙山邦雄、
　堀　司朗
○欠席委員
　なし
○市側出席職員
　鶴岡市長　榎本政規
　教育委員会教育部長　長谷川貞義、教育委員会社会教育課長　榊原賢一、
　教育委員会藤沢周平記念館長　鈴木　晃、同館主査　三浦眞紀、同館専門員　成澤万寿美、
　同館専門員　進藤恵理也、同館嘱託学芸員　齋藤冬華
○その他出席者
　髙橋吉弘、穴澤　亮（運営支援業務受託者）
○公開・非公開の別　　非公開
○非公開の理由　　顕彰する個人の情報を含むため
○報告
（１）平成 26 年度運営状況について
　◆内容
　平成 26 年度入館者並びに書籍等販売実績について報告
　◆質問・意見など
　・特になし

○協議
（１）　開館 5 周年記念特別企画　第 8 回企画展について
　◆内容
　・企画展名称案：第 8 回企画展　作家藤沢周平の誕生
　・会期案：平成 27 年 4 月 3 日（金）～10 月 6 日（火）
　・企画監修者案：鈴木文彦氏、栗原正哉氏
　・展示構成（展示コーナーA～D）における展示構成案を説明
　　A 部：導入、出発点だった直木賞

B 部：小説を書く「動機」　　二足のわらじから専業作家へ
C 部：藤沢周平の「修行時代」
D 部：昭和 51 年スタイルの確立

・図録：①名称　　鶴岡市立藤沢周平記念館　開館 5 周年記念特別企画
　　第 8 回企画展　　作家　藤沢周平の誕生
　　②発行日　平成 27 年 4 月 3 日（会期初日）
　　③規格　　既企画展図録と同様とし、約 48 ページ
　　④内容　　・監修者　遠藤展子氏のごあいさつ
　　・藤沢周平氏担当編集者のインタビュー・寄稿・採録
　　・展示内容の紹介

◆意見など

◎企画展名について

・作家よりは小説家の方が好き。随筆 1 本書くと作家になってしまう。
・肩書きがなくて困ったっていうエッセーがある。名前だけかもしれないが、名刺を持っていたので、それに何て書いてあったか確認してみる。
・5 周年記念、前期後期あったとしても〈5 周年記念 作家藤沢周平の誕生〉、それから次の後期も 5 周年記念で良いと思う。見る方にはあまり関係がない。

◎展示構成について

・館の方の理解の流れとしては非常に良く整理されていて良いと思うが、一般の人が見る時の事をもう少し考えた方が良い。例えば、修行時代の写真、先生の写真、というものが、一番見る。ここで一番すごいな、と思うのは、『蒿里曲』とか、『赤い月』の原稿。見る者として有無を言わさない力のあるもの、写真とか、先生の写真はそのひとつだと思う。今日も、館内を見たが、もう少し先生の写真があっても良いのではないかとつくづく思った。もう少しその「見る」方の事を中心に考えてもらう場面があっても良い。
・写真については古いネガもあるので、今それを調べているところだが、自分で撮っている写真が多い。
・先生自身が撮っていた写真として出すのも面白いかもしれない。
・三田村鳶魚は全集の中で、時代小説作家を徹底的に罵倒している。だから、藤沢先生の出発としてはすごく良い。要するに、江戸時代のこと知らないで、江戸時代の武士がこんな事を考えるわけがないとか、江戸時代には「社会」なんて言葉はあり得ない、それを使っているのは何だっていう話などは、すごく面白いので是非読んでみてください。最近『時代小説批判』っていうタイトルだったと思うが復刊されている。とても面白いから、今後のためにも勉強したら良いと思う。
・とても面白い本なので、藤沢先生はずっと買いたかったんだが、当時はお金がなくて、購入できなかった。賞を取った頃は、これから時代小説書きに行くという時にそれを求めたっていう、そういうエピソードがある。
・いつも、「見れるもの」という事について考えてはいる。やはり、どうしても文字が多くなってしまうので、展示部分ではなく図録に誘導するような事でも良いかもしれない。

展示は文字数を少なくして、写真とかを出す、という方向に。

・『蒿里曲』『赤い月』このふたつを出すだけでも、藤沢周平さんのファンの人とか、研究者的な読者とかにとっては、それだけで大変な価値があると思う。新聞記者の文化部の人に紹介したら、本当に記事にしたがるだろうと思う。

・藤沢さんでも、これだけ何回も何回もやって、『冥い海』にたどり着き、やっと小説をかけたっていう気がすると言っている重みが、草稿で実証できると思うから、そういう意味では、藤沢さん研究としては良い会になるような気はする。

・作家が、文体を身に着けていくっていうのが良くわかる。展示場で観るのは限界があるので、今度の図録を、いつもより詳しく、初期の試作を紹介するというということで、ページをたくさん取った方が、非常に価値のある物になるので良いのではないか。

・一番最後のスタイルの確立での書籍の展示だが、当時の装丁とかにも時代は出るわけだし、藤沢さん自身も装丁を確認されたわけなので、文庫本を添えても良いが、文庫本は流布本なのでやはり単行本を展示すべき。時代性が出てるから。藤沢さんにとっても思い出深い。

・作家の風貌というものは、やはり教科書か何かに載っているのでだいたい定着してる。誰でもそうだが、内に抱えるもので風貌が内面から変わっていく。修行時代も含めて、それに至る前の時の風貌に接するだけでも、作家としての修業部分実感できるのではないか。

・展示の流れとしては、とてもわかり易くなっているが、見てもらうという形ですれば、よほどじっくりとした形で時間を割いてもらわなければ困る。そこにいて、勝手に見ていって下さいという分では、わかりかねる部分が出てくるのではないかなと思う。大まかな流れだけでも各人がたどっていけるような、館内のガイド的なところをやっていただける何かあれば良いのかなと思う。

・作家藤沢周平さん自身の流れの中で展示が動いているわけだが、例えば、時代小説という、文学的な方向性を選んで書く時の、地元の文学者との話し合いとか、語らいの部分などが若干入ってくると、地元の人達が、館に足を運ぶ時のひとつの何かになるのでないか。そういった部分が若干でも図録なり何なりの中に入ってくるようであれば、いいのかなという思いもしている。工夫された展示の様式にはなっているが、よほどじっくりでないとなかなか真意が伝えるのに困るのではないか、さらっと流れられると困るなあという感じもする。

・作家がどのような影響を受けたかを知る有効な手段は、手紙があるとか書付けがある時である。それ以外は証拠がないわけなので、勝手に想像してこの人の影響を受けただろう、というわけにはいかない。手紙を探していただくなり、ということが大事。

・この地方の、例えば『又蔵の火』とかその関係の中に、地元が出てくるとさらに関心は深まるのではないかと思う。我々もそうだが、地元のものを少し展示の中に入れていただくということは良いのではないかなと思っている。

・記念展としての企画内容すごく良いと思う。特に、時の流れからいうと、A と C が入れ替わるのが普通な訳だが、それを C をメインとされたところすごい。

・今回の企画を担当する責任者のお二人が在京の方で、新しい見方を提示していただける

かな、とすごい期待がある。地元の方でないっていう部分のところで、どういうようなことでこういう世界が広がるのだっていうような期待感もすごく持っている。地元の方が行う時もあって、そういう風に入れ替わることで変化があって、次のところがどうなっているのだろう、というような形でのリピーターの機会を有してる。

◆協議結果

・企画展名については、頂戴した意見を踏まえ、前期後期ともに〈開館 5 周年記念特別企画展〉とし、「作家 藤沢周平の誕生」の部分は監修者と市（記念館）で相談し決定する。なお、いずれも第 8・9 回の冠はつけない。

・展示構成については、今回発見された草稿を核とし大切に取扱いつつ、藤沢先生や藤沢先生を取り巻く写真などの「画」を盛り込むことで、より観る側への配慮を行った展示内容となるよう、監修者と市（記念館）で相談し決定する。

（２） 開館 5 周年記念特別企画　第 9 回企画展について

◆内容

・企画展テーマ案：「海坂藩」が登場する作品

・会期案：平成 27 年 10 月 9 日（金）～平成 28 年 3 月 29 日（火）

◆意見など

◎内容について

・一番出るのは『蟬しぐれ』だが、実は、藩名が出ないで海坂藩以外に在り得ないのは『用心棒』『三屋』。『蟬しぐれ』と同時連載なので、藤沢さんが「海坂藩」って書けなかった。そういう事情があるが、海坂藩そのもので、例えば笄町、名前が少しずつ変わって出ていたりする。川の名前も変わっている。だけども、やっぱり海坂藩ものと考えても良いくらいのもの。広く海坂藩ものをやるという風にした方が良い。

・鶴岡の食べ物が一番出てくるのが『三屋清左衛門』。鶴岡市が食文化を売りにしようとしたら『三屋清左衛門』を扱うっていうのは必須のことになる。

・海坂ものの方が広く扱えるが、「限る」という手もあると思う。

・最高期の短編である『玄鳥』などは、全部海坂ものって言っていいのだが、海坂という言葉が出てくるのはそんなに多くない。

・本にならなかったものでも、新潮社の短編は全部海坂が出てくる。文春の『早春』に書かれているのにはあんまり出てこない。

・海坂藩ではすごく限られる。海坂ものにした方がいいと思う。『隠し剣』のシリーズなんて、みんなそうだが、出てこないのもあるから。

・『海坂藩大全』を作ってもらったから、大全で全部だと思っている人が結構いると思うので、本当はもっとあるのだ、ということを知ってもらう良い機会かもしれない。

・タイトルに「海坂藩」と出しても、藩名がついてないような『三屋清左衛門』だけをやるわけでなく、『蟬しぐれ』もやり、ということであれば、説明だけしておけば大丈夫。

・なぜ『三屋清左衛門』で海坂藩が名付けられなかったのかというのを向井敏さんが書い

ている。

・城が変わっているのもある。最初は天守閣が出てくる。最初は五層の天守があった。『暗殺の年輪』

・先生自体は、そんなに厳密にこだわっていなくて、そんな風に考えてはいなかったのだと思う。

・『三屋清左衛門』、『用心棒』シリーズもそうだが、『風の果て』と同じように作品として１本で取り上げられた方が、良いような気がする。それだけの内容と人気もあると思う。そうすると、海坂もの、海坂藩となると難しくなってくる。『蟬しぐれ』は一度やっているし。

・5 周年で一番必要なのは、人がたくさん来る企画だと思う。これに尽きると思う。こういうものやっている以上は、人が入らなければ、こちらが、如何に意味がある、といってもだんだん意味がしぼんでくると思う。今度の直木賞受賞前後、作家藤沢周平の誕生っていうのは、そう意味で非常に良い企画だと思うので、人が入るということを考えていった方が良いと思う。

・何か作品にすると、普段でもできるので、メリハリがなくなってしまう。やはり藤沢作品としては、「海坂藩」というのが良い。

・海坂イコールここ鶴岡って結べる。イコールじゃなくても。

・食べ物とかは人気がある。市として食文化に力を入れるのであれば同調させてやれる。それはすごく大きいと思う。

・食以外の要素も色々あるわけで、「海坂藩」で流行っていた剣術もある。

◆協議結果

・企画展テーマについては、頂戴した意見を踏まえ、広く「海坂藩」を捉える方向で、監修者と市（記念館）で相談し決定する。

・会期については案の通りとする。

○その他

運営委員任期延長に関する承引依頼

◆内容

・運営委員の任期は、１年。本年度末で満了となることから、現委員に来年度も引き受けていただきたい旨を口頭依頼。正式には年度末に文書を持って依頼する。

◆一同了承